

=====

ふくしま

2015. 7. 22

復興支援フォーラムニュース No. 98

(URL <http://www5a.biglobe.ne.jp/~tkonno/FK-forum.html>)

<事務連絡先> 今野順夫 (tkonno67@gmail.com)

=====

第95回ふくしま復興支援フォーラムでのご意見等

7月9日、福島市A O Zで、第95回ふくしま復興支援フォーラムを開催しました。

大和田新氏（フリーアナウンサー）から、「震災報道の現場から ～伝える事の大切さ、伝える事の素晴らしさ」について、報告していただきました。30人の方々が参加されましたが、会場内で提出されたご意見等は、以下の通りです。

~~~~~

★ 大和田さんの話は何回か聞きましたが、あらためて、この津波が、原発事故が、忘れてならない事と思いました。（M.S）

★ インタビュアーと自分が同じ立場にいたら、何ができたか、どうしたか、考えさせられました。（Y.M）

★ 一線を退いてもものの、取材し、記録し、伝えていくことを、福島で続けていこうと思う。何のために！を日々自問自答しながら、少しでも力になれるものかと思っている。大和田さんとは、方法は同じでないかも知れないが、それぞれの持ち場で、突破口を模索するしかないのだろうと。それが本日の感想です。（S.K）

★ 報道する、つらい仕事ですね。（K.A）

★ 放送で聞くのとは異なり、生で聞くととても迫力がありました。私は、子どもたちのために、できることをいつもやっていきたいと思っています。

★ 東日本津波原発事故大震災。4年経ってしまった今だからこそ、一人でも多くの人に今日の話が伝えられる様に、自分で何ができるか考えさせられました。答えはまだありませんが・・・（J.T）

★ 福島県における今回の問題の本質は、「天をうらむわけにはいかない」「地震や津波のせいにはできない」「人間がコントロールできない科学技術でおこった」ということにあると思います。直接死1600人と関連死1900人との両者に思いをはせ、これからも引き続くであろう関連死を防がなければならないと思います。

★ 東日本津波原発事故大震災の記憶を風化させないこと、福島復興を担う子供たちを生かすこと、改めて心に刻みたいと思います。（Y.N）

★ 今日のように「伝える」ことで、知った事、感じた事はたくさんありました。一方で「伝える」ことの難しさ、私も情報を扱う身として、考えることが多々ありました。

★ 今日には心に届くお話ありがとうございました。ラジオは私の家事のお伴であり、心の友です。大和田さんの放送は、以前から、そして今も聞かせていただいております。大和田さん、これからもお体を大切に、東日本津波・原発事故の事、そして福島のことを伝えていって下さい。（A.I）

★ 震災報道の現場において、被災者に対する取材活動の中で体験されたこと、メディアとして「伝えることの難しさ」、事例を交えて切々と伝えられましたことに、心より感動いたしました。

た。(K.F)

★ お話の中では触れられなかったことなので、これは私の邪推ですが、「伝えたくても、伝えられなかったこと」も、いろいろおありだったろうとお察しします。ありがとうございました。

(S.A)

★ この4年4ヵ月の間、私も何の気もなしに、「東日本大震災」と表現してきましたが、大和田さんのお話を伺い、私自身の中に風化させる芽、物事を表面的に捉えがちな芽をもっていたことにハッと気がつきました。長く語り継いでいくためにも、私も、今後「東日本津波・原発事故大震災」と表現していきます。若者たちに学んでいきます。ありがとうございました。(T.I)

★ 大和田さんの講演では、何時も涙が出てくる。東日本津波・原発事故大震災の風化が進む中、大和田さんのような、熱のある「伝える力」が必要となる。大和田さんの「福島復興・再生は、若者が担うことになる。その為には、教育と医療が必須となる。」には同感。廃炉までの40年は生きることができない私も、人生の残すところ、微力ながらその一助になりたい。(R.N)

★ 遅れてすみませんでした。貴重な話と、久しぶりに大和田さんに会えてうれしかったです。感謝します。(N.H)

~~~~~

【予告】第97回フォーラム 2015年8月6日(木) 18:30~20:30

「相双地域におけるメンタルヘルスケアの取り組み」

報告者：丹羽 真一 氏(福島県病院事業管理者、
福島医大・会津医療センター 精神医学講座 特任教授)

会 場：福島市アクティブシニアセンター「AOZ (アオウゼ)」視聴覚室

~~~~~

【予告】第98回フォーラム 2015年8月20日(木) 18:30~20:30

「福島県居住支援協議会 震災被災者の住宅再建支援と高齢者等の地域見守り」

報告者：斎藤 隆夫 氏(福島県居住支援協議会事務局長、  
一般財団法人 福島建築安全機構 専務理事)

会 場：福島市アクティブシニアセンター「AOZ (アオウゼ)」大活動室1

~~~~~

【予告】第99回フォーラム 2015年9月3日(木) 18:30~20:30

「仮設住宅の実態について」

報告者：鎌田 光利 氏(大玉村安達太良応急仮設住宅自治会長)

会 場：福島市アクティブシニアセンター「AOZ (アオウゼ)」大活動室1

~~~~~

## <講演紹介> 大和田新氏の講演

佐藤政男

第95回ふくしま復興支援フォーラム

「震災報道の現場から ～伝えることの大切さ 伝えることの素晴らしさ～」

大和田 新氏（前ラジオ福島・アナウンサー、現：OA企画）

大和田さんは、4年4ヶ月前から現在に至るまで、「東日本・津波・原発事故・大震災」で被災された人びとの住む現場で粘り強く、継続的に続けてきた取材内容を詳細に心をこめて紹介された。様々な取材写真に加えて、ラジオ放送記者としての取材でのインタビューの肉声が紹介され、顔は見えないが、強い思い・説得力を与えた。尚、氏名綴りは聞き書きで不詳なのでカタカナで表記した。

### 1. “家族一緒にないストレス”が放射線ストレスより大きかった

福島市飯野町の小学生の姉・弟が、2011年3月12日に母とともに東京へ避難したが、父を残したことを気にして、母を説得して3月24日に飯野町へ帰った。以後、自宅前の国道114号線を並んで通る支援の警察・自衛隊車に自分達で作った感謝のボードを2年間休まず掲げ続けた。報道した大和田記者に2人から手作りの表彰状が送られた。伝えることの大切さと素晴らしさを感じた一瞬だ。新道徳の教科書にも取り上げられているという。

### 2. 数字を伝えただけでは震災の実態は伝わらない 中味を伝えること

今後50年、100年と記憶にとどめ伝えるために、大和田さんは、「東日本津波・原発事故・大震災」と呼んでいる。津波と原発事故による被災が福島の特徴だからだ。

その具体的な点は、

- ①マグニチュード9.0の地震で約2万人が死亡した。これは浪江町の人口(2.2万人)に匹敵する。
- ②震災関連死は1,965人で、直接死1,604人を上回り、福島は、宮城、岩手と異なっている。不幸な自殺者は、3県で25件だが、福島はそのうちの20件を占める。

メディアは、2万人死亡の数字を伝えたが、それだけでは「東日本津波・原発事故・大震災」を伝えるには限界がある。生活する人びとの内容を伝える必要がある。

### 3. 津浪で死亡した少女の豊かな感性を生かす道へ

鈴木ヒメカさん（10歳、豊間小学校4年）はフィリピン人の母とともに津波で死亡した。生前、色彩豊かに、青い海の上の黄色い空間に描いた「塩屋崎灯台」の絵は、現在ハンカチになっている。大人と違って、子どもは、灯台上部で見ている人、行こうとしている人は、そこに書かれた以上の人数（ふくらみ）を感じることができるといい、大人の感性と異なっているのではないか。このような感性のある子供が死んだ。2人を亡くした父親は、「ヒメカは10年間の期間限定で、神様が私に与えてくれたもの」と言っているという。

このように、「死亡者2万人」と報道は伝えるが、感性豊かな子供たちを含めて2万人の何十倍の人びとが苦しんでいるのが、福島の「津波・原発事故大震災」の現実であると大和田さんは言う。

### 4. 多数の人びとを助けて、間に合わず死亡した高校生

工藤盛人君はいわき海星高校生3年生だった。地震・津波発生時には、祖父母がいる海岸近くの家に戻り祖父母を助けようとした。その途中、高校の後輩の女子高生（アイさん、仮名）に会い、「お前、津波が来るから逃げろ」「いや、今まで津波なんか来たことないから逃げません」「ダメだ、すぐ来るぞ」「大丈夫です」というような問答を繰り返した。そこで、盛人君は、アイさ

んの腕をつかんで、通りかかったバスに無理に乗せた。しかしその後、そのバスの運転手が、「津波がきている。降りてあの山手に逃げよう」と全員で逃げ、この女子高生は助かった。

次いで、盛人君は介護施設の看護師を含む2人の職員（鈴木さん、小山さん）や被介護者が道に迷っている状況に会い、逃げる事が出来るように介護者を助けたという。めどがついた後、職員は盛人君に逃げるよう勧めたが、「大丈夫です」と言って、家に戻り、2日後に祖父母、盛人君の3人の遺体が見つかった。後で大和田さんがインタビューしたとき、介護士は、盛人君が「手伝います」と即座に言った時、「とてもかっこいい」と思ったという。

このような事はどうしてわかったのか。広報にその死が報じられてからである。盛人君に助けられた方々が、母親を訪ねてからであるという。いずれの方も、「私を助けなければ、盛人君は助かったのではないか」と悩み続けていた。後輩のアイさんは、父母から、盛人君の母親に会いに行くことを反対された。

話を聞いた盛人君の母親は、最初「何故逃げなかったのか、私が十分教えなかったからか」と思った。しかし、後で消防士が届けてくれた帯同していた荷物の中に、「工藤盛人、普通救命講習終了証」を見て、また、震災・原発事故を伝える語り部が紙芝居を作りその話を聞いて、今は、「他人を助けた息子を誇りに思う」、助かった人にも「今、生きている事を大事に、一生懸命生きてほしい」と言われている。アイさんは、自分を恨み続けていたが、母親の言葉に、気持ちが救われ、納得した。

大和田氏は、亡くなった方1名というだけではなく、1人の死に多くの方がかかわっていることを知らなければ震災を理解できないと主張する。

#### 5. ここは観光地でない、被災地だ —マスコミの取材姿勢が問われる—

大和田さんは、南相馬市原町区の上野隆之さん（41歳）を訪ねた。原発から21kmにお宅があり、屋内退避地域だった。家は海から1kmにあり、7mの津浪で全壊したが残っている。父、母、8歳の娘さん、3歳の息子さんの4人を亡くされた。父と3歳男子はまだ見つからない。大和田さんが最初に名刺を渡したら目の前で破られた。「てめえなんかに話すことはない!」。多くのマスコミ人が来て、その中に心無い人がいて、壊れた家の玄関口にある亡くなった子どもの写真に手を合わせる事なく、家の中に入り込み取材をしようとした。「ここは観光地でない、被災地だ」と上野さんが叫んだそうだ。

大和田さんが20回位通った後、上野さんは、ようやく話をしてくれたという。思い出の残る、まだ見つからない父、息子を思って、壊れかけた家を壊さないでおき、後で隣に新築した。

今は、春には、菜の花で巨大「迷路」を作り、夏はひまわりをいっぱい咲かせている。夏には、大きな花火を打ち上げているという。須賀川市の花火師の糸井一郎さんが、無料で花火大会を仕切っているという。東京オリンピックで糸井さんに花火を打ち上げてほしいと、上野さんは言っている。毎日、海岸に行き、父と息子さんを探し続けている。

#### 6. 原発事故がなかったら

上野さんの奥さんは妊娠していて、原発事故により避難して21kmにある家を離れざるを得ず、母、娘さんは3日後に見つかった。しかし、奥さんは最後のお別れもできなかったという。後ろ髪をひかれる思いだったことを上野さんが知ったのは、無事出産後しばらくしてからだったという。原発事故により、20km圏内は誰も入れず、上野さんは、「もし捜索できたら命も助かったかもしれない。だから、東京電力が、ここに来て謝ってくれなければ、心がおさまらない」という。

上野さんは、自宅に骨壺の入ったまま、納骨しないで置いてある。母と娘さんの骨が入り、父

と3歳の息子さんのは、箱だけだ。自分が死ぬまで納骨しないという。「妻が見つかったら俺は死ぬ。ラジオで、“亡くなった人の分まで生きようなど、無責任な事を言うなよ”とされている大和田さんは、マスコミはいかに人びとの心に寄り添うことが出来るかだという。

上野さんの隣家の今田さんは、66歳の父と母、妻、20歳、16歳、10歳の6人を亡くした。7人家族のうち、残ったのは自分だけだという。今田さんは、家族が逃げる途中で、離れ離れになった屋根の上で、「協力して生きるんだぞう！」と叫び、見つかった遺体は家族が固まっていた。

### 7. 助かった中学2年生はPTSDを乗り越え、人の命を助けたいと国際的に訴える

中学2年生だった遠藤リョウカさんは、平商業高校生だ。3.11は、母親と病院へ車で行き診療中に、津波が発生し診療中止を言われた。帰る途中で津波に遭遇した。車は半分津波で覆われたが、自分では、車が防風林に打ち付けられた事、ガラスが壊れなかったこと、脱出段階でガラスが壊れ、脱出できた3つの奇跡があって助かったのだという。

遠藤さんは、震度3以上で震えるなど、PTSD (Post Traumatic Stress Disorder : 心的外傷後ストレス障害) に悩まされ続けた。それでも犬を飼って癒されたりしてPTSDを克服しつつある。命の大切さを心から思った遠藤さんは、人の命の大切さを伝えたいと、フランスなど7か国に出かけて訴えている。“有難う”は、お礼の言葉だが、当たり前なのが難しいと書く。日常の当たり前のことがいかに大切かという。

### 8. 浜通りの子ども達のこころ

大和田さんは、浜通りの子は、皆PTSDの要素をもっていると感じている。それを特に感じたのは、放射線のため外で遊べない子供たちが、平工業高校体育館で遊んでいた光景からだ。遊びは、「津波がきたぞー」と叫ぶと、子ども達は逃げる。高い所に逃げたら勝ちだ。地震遊びも同じようだ。日常の遊びの中でもいつも津波と地震が心にある。県は4年間に、この子どもたちに十分心のケアをしてきたのだろうかとか疑問を投げかけ、PTSD発症を懸念している。廃炉・復興を担うのは、福島の子供達だからだ。

### 9. 復興には教育と医療が必要

福島第2原発のある富岡高校の17歳の若林ミノリさんは、2012年3月の卒業式で、「人間のコントロールできない科学技術が現在の社会状況を作り出した」と原発使用を告発した。大人たちが明確にいうことに言いよんでいる高校生が、関東出身の若林さんが、福島で学び、「人間のコントロールできない科学技術」を見抜いている。このように、若い力は吸収する力がある。伸ばす教育が大切である。

大和田さんは、声を大きくする。

- 大人はもっと若者から学ぶ必要がある。
- 大人はもっとよく考えるべきだ。今日(7月9日)から始まったが、多くの死者を出したいわき市豊間中学校校舎を何故解体するのか。記憶するため残すべきだ。壊したら何も残らない。今後、浪江町・請戸小学校を残す運動を始めよう。
- ここにいる人も含めて、「自分の問題としてとらえていかなければならない」。2万人の亡くなった人には、その10倍以上の「人びと」がいる。それらの全ての死に向き合っていかなければならないが、もし出来なければ、「何かを伝えていかなければならない」のではないか。一人一人の死が積み重なって2万人の死となった。

(文責：佐藤政男、福島市在住)